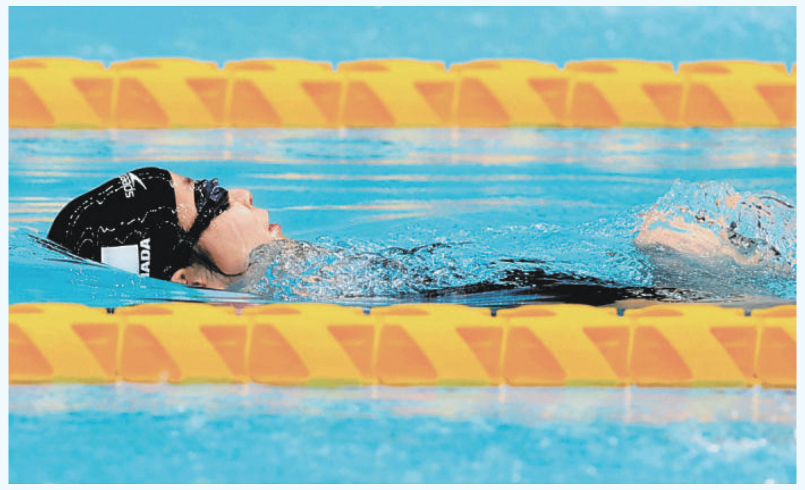
こども記者が選んだ「イチ押し」
東京2020大会の選手たち

パラリンピック編



女子50㍍背泳ぎ（運動機能障害S2）決勝で2位になった山田美幸選手

水泳と進学を両立

日本パラリンピック史上最年少のメダリストとなった競泳の山田美幸選手がひたむきに泳ぐ姿は、テレビで見ている私たちにたくさんの勇気を与えてくれました。インタビューで、競技と進学の両立を頑張りたいと話していました。中学３年生で受験を控えアスリートでもある山田選手の努力は、並大抵ではないだろうと尊敬の気持ちでいっぱいになりました。（小６／水上清佳）

夢に向かう姿に感動

東京2020パラリンピックに出場した選手の中で私は山田美幸選手に着目しました。山田選手は生まれたときから両腕がなく、両脚にも障害があります。彼女がわたしと同じ14歳だということに驚きました。同い年なのに夢を持っていてそれに向かって進んでいく姿にはとても感動しました。（中３／大迫環）

細かい所にも注意

競泳の鈴木孝幸選手は他の選手がフライングをしたのを見てコールから号砲までの時間がいつもより少し長いことを確認しました。このような細かいところにも目をむけ、両手足に障害があることを乗り越え、金メダルを獲得しました。（小４／芹川莉那）

水のプリンセス

競泳の一ノ瀬メイ選手は、先天性右前腕欠損症のため、生まれつき右腕が人より短いのですが、１歳半で水泳を始めました。障害を理由に地元のスイミングスクールへの入会を断られましたが、小学２年生のとき、近畿障害者水泳選手権大会で２種目に出場し、１位になりました。東京2020大会には出られませんでしたが、力強い意志を泳ぎで伝えることから、愛称は「水のプリンセス」です。（小５／林莉央）

いつも全力プレー

決勝進出を決め、宮島徹也選手と抱き合って喜ぶ香西宏昭選手（右）

車いすバスケットボールの日本の試合は、すごくおもしろかったです。決勝戦ではアメリカに４点差に迫りました。コート上の５人全員がいつも全力でプレーし、素早い動きを続けて、やる気いっぱいのバスケでした。香西宏昭選手はよく３点シュートを決めていました。日本人のゆいいつのプロ選手です。鳥海連志選手はいつも素早く、ずっとコート中を動き回り、ピンチの時もいろいろなことをやる、すごい人です。（小４／大堀立真）

悪条件で８㍍18㌢

走り幅跳びで金メダル３連覇を獲得したマルクス・レーム選手　＝©アフロスポーツ

マルクス・レーム選手は走り幅跳びの義足クラスで、８㍍62㌢を自己最高記録とする選手です。オリンピック選手に匹敵しますが、義足が「ドーピング」になるため、オリンピックへの出場は認められませんでした。今大会では雨で地面がすべる中、８㍍18㌢を記録しました。レーム選手は「そのかげにある努力を見てほしい」と言っています。いつか、オリンピックでメダルを取るレーム選手を見たいです。（小４／ちさと）

健常者より良い記録

ドイツ陸上男子のマルクス・レーム選手はドイツ陸上選手権で健常者を抑えてドイツ王者となりました。今年のパラリンピックでは大差をつけて陸上男子走り幅跳びで３連覇という結果を残しました。私は義足を使いながらも健常者よりも良い記録を出したことがすごいと思いました。（中３／Raino）

限界 自分で決める

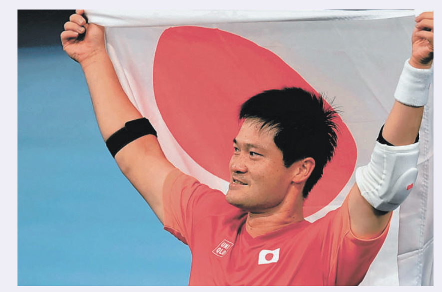
マルクス・レーム選手は14歳の時にウエークボードの事故で、右足のひざ下を切断しました。走り幅跳びは利き足である右の義足で踏み切ったところ記録が伸びました。今大会は金メダル３連覇を果たしましたが、オリンピック金メダルの記録８㍍41㌢は超えられませんでした。心に響いた彼の言葉は「自分の限界は自分で決める」です。選手たちの努力に、私たちは「限界は自分で決める」ことを思い出し、感動するのだと思います。（小４／浅岡蓮）

いつでも前向き

大阪府出身のアーチェリー代表、岡崎愛子選手は、2005年４月のＪＲ福知山線脱線事故で頸髄（けいずい）を損傷し、今でも首から下がまひした状態です。事故が起きた後も、「家族に頼らず生きたい」「事故にあった過去を見てほしくない」と思い、いつでも前向きに生活したそうです。競技を始めて５年ですが、コロナ禍の中でも諦めずに自宅でトレーニングをしていたそうです。（小６／大迫輝）

アーチェリー女子準々決勝で矢を放つ岡崎愛子選手

けがや自分の弱さに負けず 金メダル



男子シングルスで優勝した国枝慎吾選手

車いすテニスは一般と同じコートの広さ、ネットの高さで行われますが、２回バウンドしたボールを返すことができます。打つ時に車いすからお尻を浮かせることは禁止です。シングルスで金メダルを獲得した国枝慎吾選手は９歳の時に病気で車いす生活になり、小学６年生の時に車いすテニスを始めました。けがや自分の弱さに負けず金メダルを獲得してすごいと思いました。（小４／豊島悠太）

第３ピリオド、豪州のライリー・バット選手（右）をブロックする倉橋香衣選手（左）

車いすラグビー倉橋選手「自分のプレーやりきった」

車いすラグビー銅メダリストの倉橋香衣選手にオンラインで単独インタビューしました。初めて出場したパラリンピックでは「自分たちのプレーをやりきった。（自身は）最後のオーストラリア戦では体格の大きなライリー・バット選手にうまい具合にぶつかりました」と話しました。心がけていることをたずねると「障害が重くてスピードが遅いので、次に何が起こるかを常に考え、先読みしているようにしています。先読みをして、決めたら迷わずに実行することを大切にしています」と答えてくれました。倉橋選手は、決めたら迷わず突き進む人だと感じました。（小４／垣本律紀）

倉橋選手（左）にオンラインでインタビューした垣本律紀記者（右）＝本人提供

カヌー新種目 タイム伸ばし

カヌーの新種目バーに小松沙季選手が初出場しました。小松選手はバレーボールの選手でしたが、おととし６月に体調をくずし、両足と左手にまひが残りました。準決勝では４着でしたが、予選よりもタイムを６秒近く縮めました。（小４／加藤大和）

ボート競技３カ月でチームに

都立文京盲学校に通学する高校３年の木村由選手について調べました。ボート競技を始めてからわずか３カ月余で混合かじ付きフォアの日本チームに入りました。小学校も文京区の小学校に通学していました。木村選手は国際オリンピック委員にオリンピック・パラリンピックを東京で開催してほしいと手紙を書いていたそうです。（小６／田中杏依）

女子バーシングル予選で力強くパドルをこぐ小松沙季選手

スキーから転身

新種目のパラテコンドーの太田渉子選手は冬季パラリンピックでノルディックスキーの選手として３回出場し、好成績を残し引退しました。引退後、習い事としてパラテコンドーを始め、2019年の世界選手権で３位に入りました。パラリンピックでは、金メダルを取った選手に準々決勝で負け、敗者復活戦では２回戦で負けました。（小６／加藤三可里）

女子58㌔超級敗者復活２回戦でオーストラリアのジャニン・ワトソン選手（左）と戦った太田渉子選手

難民選手団初の女性 アリア・イッサ選手

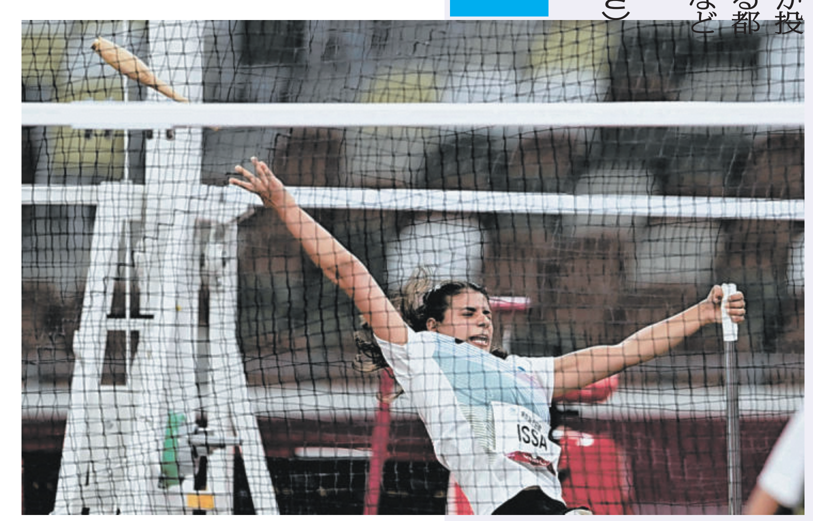
戦争のない世界に

難民選手団にただ一人の女性選手、アリア・イッサ選手がいることを知りました。小さい時の病気で、脳に障害が残り言葉を発するのが難しくなり移動も車椅子です。それが原因でいじめにもあったそうです。僕は先日、パラリンピック難民選手団のみなさんに贈るという紙飛行機を折りました。いじめや戦争のない世界になってほしいです。（小５／松島遼介）

１人６回、こん棒投げ

こん棒投げの脳性まひなどのクラスの決勝に、難民選手団で初の女子選手となったシリア出身のアリア・イッサ選手など９人が出場しました。１人６回投げる競技の結果、ポーランドのルジャ・コザコフスカ選手が、これまでの世界記録を１㍍50㌢近く更新し、金メダルを獲得しました。選手たちが投げるこん棒の多くは、文京区にある都立工芸高校の木工家具の製作技術などを学ぶ生徒が製作したものです。（小５／ゆき）

陸上女子こん棒投げ（座位Ｆ32）、難民選手団アリア・イッサ選手の投てき



新しい友達できた

こん棒投げは握力が足りず、やり投げや円盤投げなどに参加できない選手のために考えられました。難民選手団のアリア・イッサ選手は障害を理由にいじめを受けていましたが、父親に励まされ乗り越えてきました。イッサ選手は、「スポーツのおかげで自信が付き、新しい友達もできた。私のような障害を持った子どもがいても、家の中に閉じ込めておかないでスポーツを勧めてほしい」と語っています。（中１／馬場和花奈）